

成長



昨年6月に祇園屋、叶家さんに立ちのこ。

叶家さんにいる妓のうち一番年(かのえみ)さん楽しんでた。

私は、叶笑さん「笑(えみ)ちゃん

でいる。その笑ちゃんかさん。今度、『アザリ』に連れて行っやす。勉強しとういうのだ。

「勉強」の2文私は「じゃあ」と月29日、連れだっ歌舞練場へ行った

笑ちゃんは一昨日店出して、最初の



観音神社前で(24年2月)

【営業】
【最寄り駅】

大阪フイスト

「好き」がスキルに

専門学校から

言語聴覚士の仕事は、大きく分けるところがある。ひとつは、コミュニケーション障害のリハビリに携わる役割、もうひとつは、嚥下障害(飲み込みの障害)のリハビリに携わる役割だ。

「同じ言語聴覚士でも、両者は大きく違う。多くの人は、コミュニケーション障害のリハビリに携わる言語聴覚士をイメージするだろうが、実際の医療現場では、嚥下障害のリハビリに携わるのが非常に増えているのが現状だ。私が主に担当するのも、嚥下障害のほうです」

現在、岐阜赤十字病院(岐阜市)で言語聴覚士として勤務。常時、約20人の患者を担当し、嚥下評価や訓練・指導を行っている。

分かりやすく言えば、嚥下障害のリハビリとは、口からおおいしく安全に食事をするためのサポートをすることだ。飲み込み具合を判断し、それに合わせた食事内容、姿勢、介助方法など

言語聴覚士

大野木宏彰さん (39) ①



聴診器をのどぼとけの辺りにあて、飲み込みの状況を確認する大野木宏彰さん(渡守麻衣撮影)

を工夫していく。症状は、患者の日々の状態により刻々と変わる。その都度、患者ののどを触ったり、口の動きを見たりするほか、聴診器をのどぼと

どの通り具合が悪くなったりすることがある。食べ物や飲み物が気管に入ってしまうことを「誤嚥」というが、誤嚥が原因で起こる肺炎が高齢者に非常に多い。嚥下障害のリハビリは危険と隣り合わせであり、デリケートな対応が日々求められる

衰弱した高齢者であったり、脳卒中からのリハビリ中の患者であったり、嚥下障害のある人の状況はさまざま。高齢社会、介護社会が進むなか、嚥下障害のリハビリにかかわるニーズは高まる一方だ。

「しかし、実は、言語聴覚士という資格は比較的新しくできたもので、まだ発展途上のところがある」。実際、大野木さんが新人の頃は「嚥下についての専門書が少なく、経験などをものとして独学で学んだことが多かった」とい、大野木さん自身、聴診器を用いた嚥下評価についての著書があるという。

いまや言語聴覚士の中で、特に嚥下



嚥下障害のリハビリについては独学で研究したことも多かったという

障害のリハビリにかかわる専門家として知られる大野木さんだが、もともとは別の仕事に従事していた。

三重県志摩市出身で、大学を卒業後、関西のスポーツ用品店に勤務。ところが、同店の会社が経営破綻し退職。年齢や家族のことなどを考え、「手に職をつけよう」と目に留まったのが、言語聴覚士だった。

「これからの社会では、医療、介護がカギ。これらの中で、リハビリなどに携わる仕事がいい」。平成14年4月、大阪医療福祉専門学校言語聴覚士学科に進学。28歳からの再出発だった。(福本剛)

嚥下障害のリハビリ 独学で研究